土生さんのこと

山家由紀

毎水曜日午後３時、NHK2 チャンネル「俳句」を見ながら、もし土生重次さんが元気で「扉」を続けていたら講師のひとりとしてここに出ていたかもと思っています。”白皙の美貌”！？と、それに似合わぬ大阪弁で、評判になっていたかも・・・。

土生さんと初めて出会ったのは三国丘中学校２年生、たぶん結核で１年留年の後だったのでしょう。当時はまだ背も高いほうで、わんぱくな男の子たちの中で上品な色白の男前が目を引いていました。

私がいつから俳句を作るようになったか、はっきり覚えはないのですが、当時購読していた中学生毎日新聞（ちゅうまい）に投句欄があって、ときどき土生さんの句が載っていました。私も投句するようになってたまに採用されましたが、一度だけ土生さんと並んで載ったことがあります。

中学生のとき「同じクラスになりたい」とあこがれていた土生さんと、高校では３年間同じクラスでしたが、なんだかおっさんぽくなって、「憧れ」の存在から「同級生」になりました。たぶん他にあこがれの存在ができたのかもしれません。映画俳優とか・・・。富岡隆夫さん、寺田　博さんたちと文芸部で、あの文学青年たちは、わたしたちを子ども扱いしているような気がしていました。

「扉」の句会はたしか水天宮近くのどこかの会社の大きな会議室のようなところでした。大きな輪に机を並べて女性が多かったです。わたしもカメちゃんこと富岡（旧姓・亀岡）訓子さんもあんまり褒められたことはありませんでした。

平成１３年、土生さんが亡くなられた時、三国丘高校時代の同級生として富岡隆夫さんが葬儀委員長を務められ、桜井敏子さんとともに受付をお手伝いしました。最後のお別れの際にも、やはり色白の整った貌をされており淋しい思い出となっております。

土生さんにいつも言われていたことは、「たくさん作り、たくさん捨てよ」ということでしたが、実行できたことはいちどもありません。月一度の句会の土曜日、お昼に帰ってくる子どもたちの昼ご飯を大急ぎで作り、「あと一句、あと一句」と唱えながら家を出るのが常でした。出句「５句」の最後はいつも句会へ行く途上に作り上げ、その時の一句をカメちゃん（富岡訓子さん）が覚えてくれていました。

大鍋に野菜をいため夏盛ん　　由紀

私は、俳句も気軽に楽しんでいる感じです。でも何かを作ることは日常生活に張り合いができ、楽しいことだと思っています。

アカシア句会の皆さんとともに、末永く楽しんでいけることに、とても感謝しています。